

平安京の様相

寺 島 孝 一

1.

平安京城は現在まで一貫して人々の生活が営まれており、各時期の遺構が錯綜している。このため平安時代の遺構の残存状況は必ずしも良好とは言えない。しかし近年の京都市内における夥しい件数の発掘調査の結果、比較的早く廃たれた右京において、邸宅跡の発見が相次ぎ、また、井戸・土壇・溝等出土の一括遺物の比較・検討によって、土器の編年についても見通しが立てられてきている。

また、右京二条二坊で「天曆七」（953年）の墨書のある緑釉陶器が、左京四条一坊では「寛治五年」（1091年）の墨書のある須恵器鉢が発見されており、実年代を決定する定点となっている。平安京の発掘調査に基づいた平安時代の土器の変遷については、『平安京跡発掘調査資料選』（京都市埋文研編）などにまとめられている。

2.

平安時代初頭に、壺・皿・高台つき杯など器種も豊富で各々法量にも数種が認められた。土師器の食器は、10世紀に入るとほとんど杯・皿のみになる。外面のヘラ削りもなくなり指おさえとナデによる成形になる。11世紀には更に器種を減じ大小の皿の組みあわせになってしまう。

須恵器の食器類は10世紀になるとほとんど姿を消し、11世紀に入って鉢と甕を主体とした器種構成になる。黒色土器は衰退した須恵器や土師器を補う形で、9世紀中葉には器種・量ともに増大してくる。黒色土器Aは土師器で欠落した壺形のものが多いが、皿・壺・鉢など多くの器種を持つ。後出の黒色土器Bは壺形のものが多く、11世紀中葉前後に瓦器と交替すると考えられている。

3.

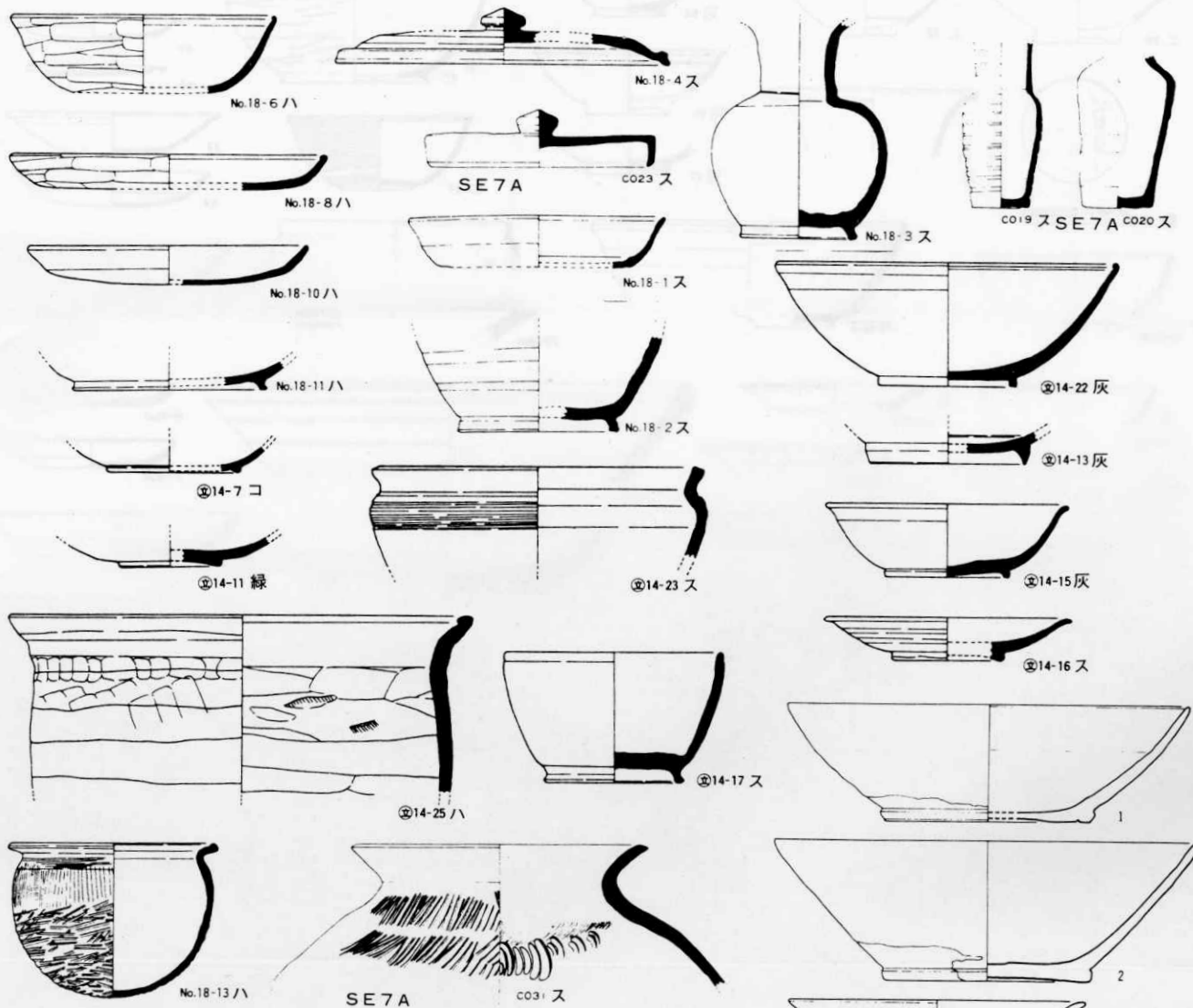
施釉陶器の年代観については、「東三坊大路」の資料による提言以来論議されてきたが、現在の平安京等消費地における共伴する土器にもとづく編年によって、施釉陶の年代を古く考える方向で収束しつつあると言える。

近年、京都市に西隣する亀岡市篠で、緑釉陶器を焼成した「三角窯」が発見され注目された。次いで京都市西京区で陰刻花文を伴う緑釉陶器窯が発見調査された。ここでは唾壺・香炉・短頸壺など、壺・皿以外にも多くの器種が出土している。引きつづいて亀岡で更に数基の緑釉陶窯が発見されており、山城地方における緑釉陶生産の実態が明確になりつつある。他にも左京区本山窯跡、西京区小塩窯跡、更に大阪吹田市の岸部窯跡など、京都周辺の緑釉陶窯は相当数にのぼっている。

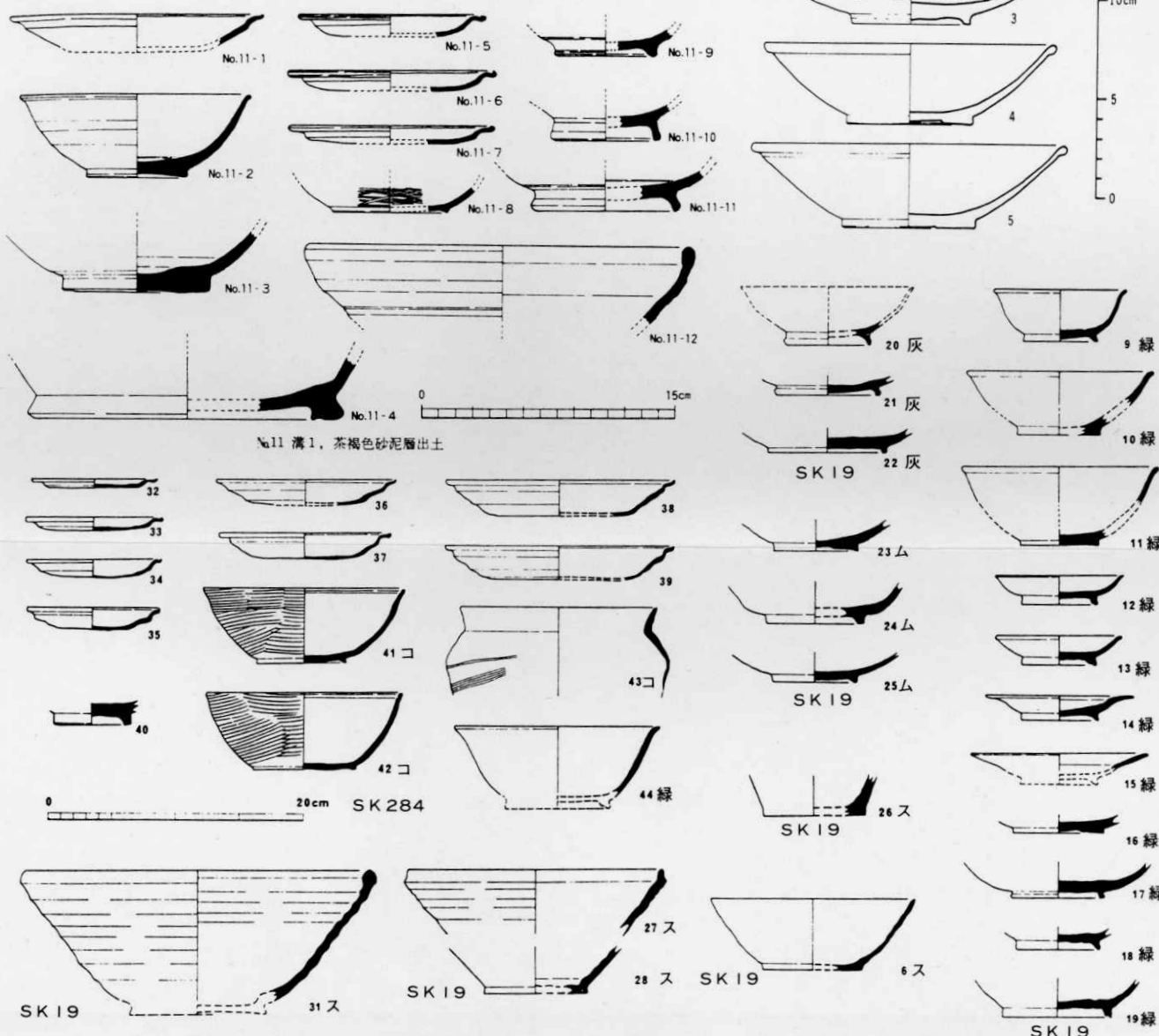
消費地である平安京出土資料の検討とともに、これら窯跡出土の緑釉陶器の比較検討が一つの重要な課題になってきていると言える。

烏丸線 No.18
黄褐色砂層

左京四条一坊
SE7A



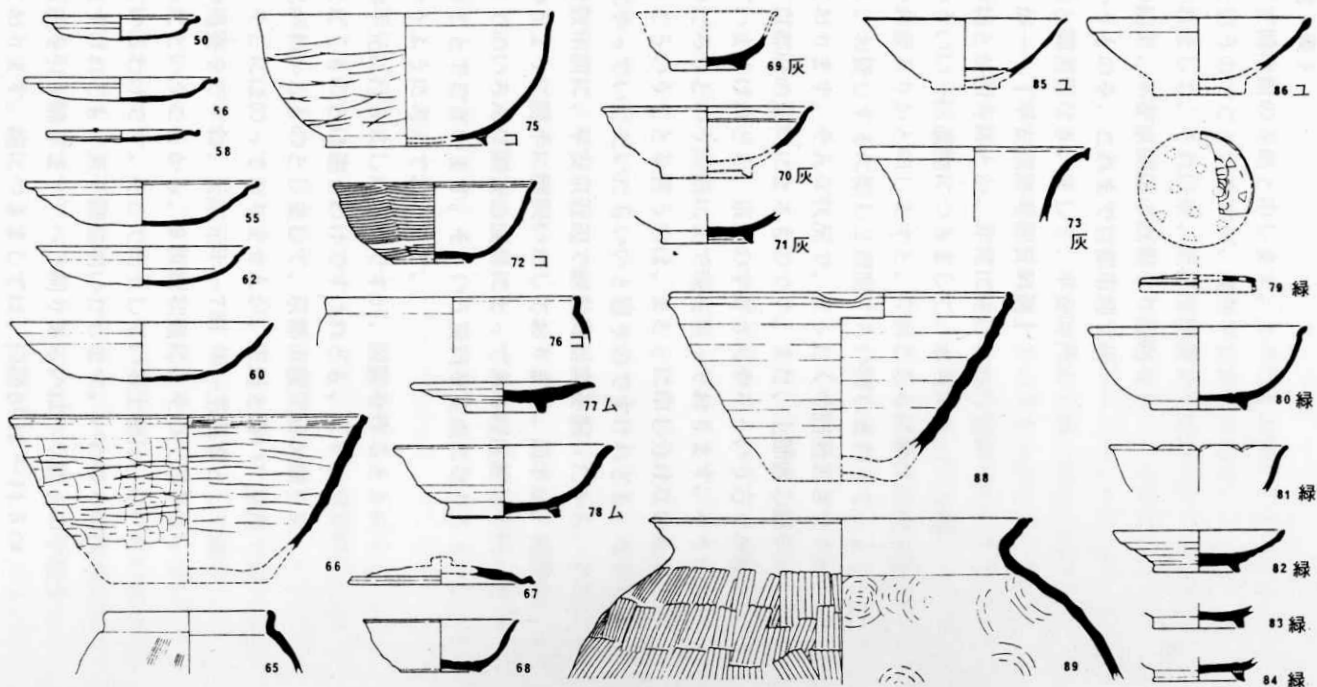
烏丸線 No.11溝1
茶褐色砂泥層



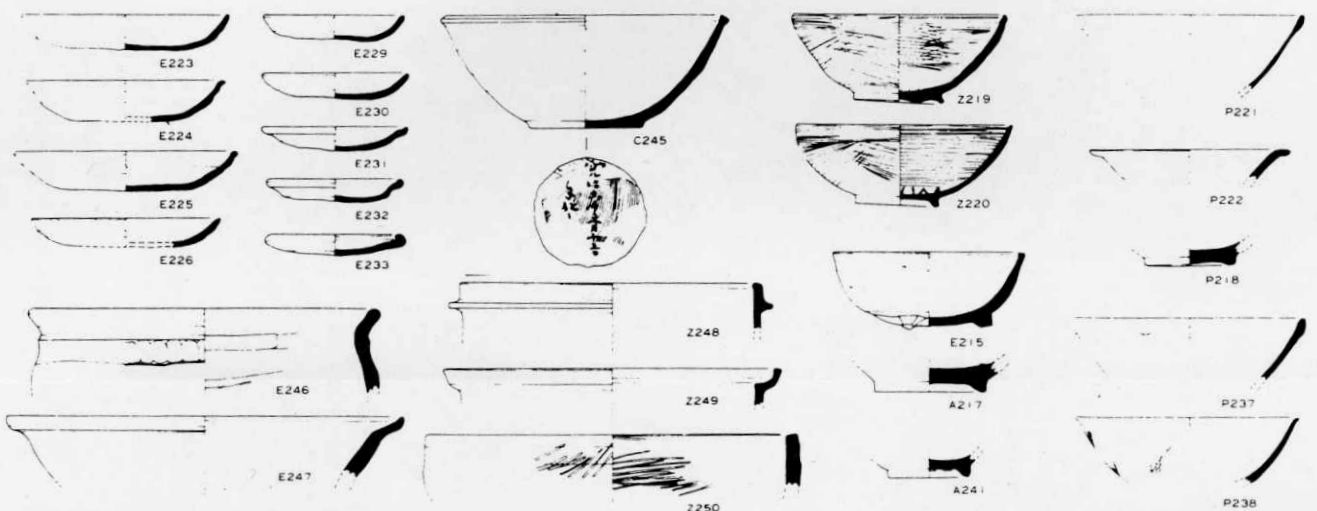
内膳町SK19
SK284

第1図

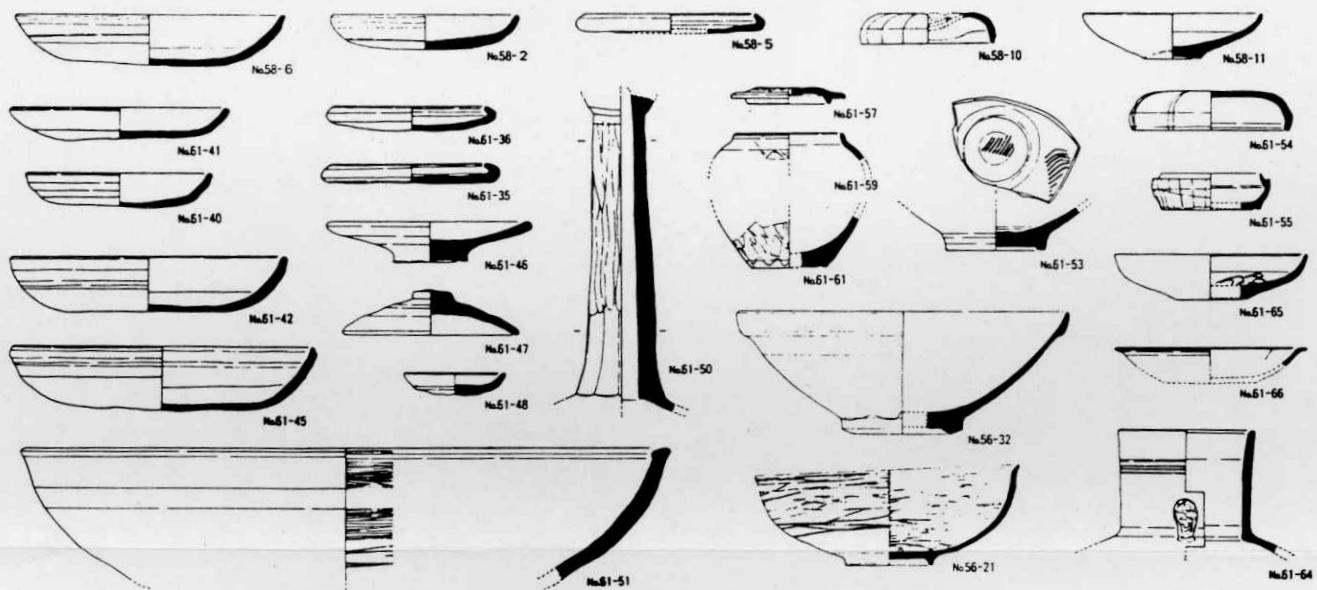
内膳町SK18
(10C末~11C初)



左京四条一坊
SE8
「寛治五年(1091)
五月十三日」
墨書

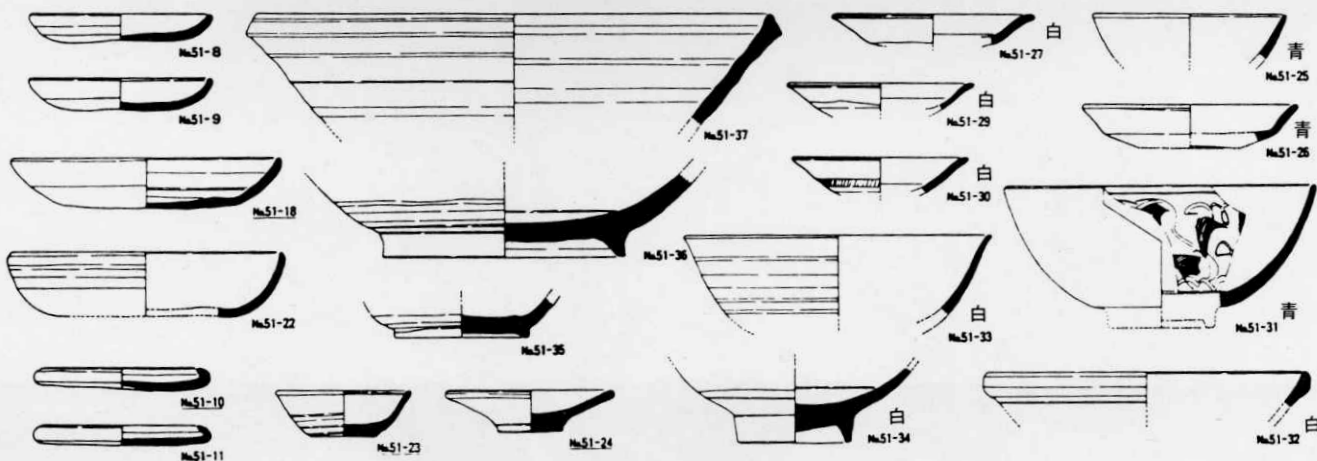


烏丸線No.58 井戸17



烏丸線No.61
暗茶褐色泥砂層Ⅱ
同 No.56
茶褐色泥砂層Ⅱ・Ⅲ

烏丸線No.51 土壇26



第2図

《 発 表 》

平安博物館の寺島と申します。よろしくお願ひします。前もっておことわりしなければいけないと思うのですが、現在平安京の発掘調査は、数年前に京都市の埋蔵文化財研究所が設立されて、それ以来、京都市埋蔵文化財研究所で精力的な発掘調査が継続されております。その結果、平安京関係の概報なり遺物なりで、非常にたくさんいい資料が出されております。そういうものを、これまで京都市埋文研——今日もだいぶみえておりますが——の皆さんが、いろいろと御苦労なさいまして、平安時代の土器、陶器の展望を——私の原稿にも少し書いておきました——『平安京跡発掘資料選』というものにまとめられました。その間私は、例えば内裏の蘭林坊とか西寺跡とか、非常に注目された遺跡をかかえながら、諸般の事情で整理できずに、そういういい一括遺物につきまして、本当にまったくお蔵入りの状態にしています。いったいどのくらいお蔵入りかと申しますと、今回こちらに蘭林坊の灰釉陶器の資料をお貸ししたわけですけれども、お貸しするに際し2週間ぐらい探しまわって、ようやく出てきたというくらいお蔵入りをしております。そんな状況で、まったく今回発表させていただく内容は、京都市の埋文研あるいは、京都府の資料によるものです。また、土師器の編年につきましては、今日、ここにお見えでございますけれども、京大の宇野さんやそういう方々が積極的に検討されて、ほぼ大きくは動かないだろうという段階にまで現在至っております。そういう点を簡単に紹介したいと思います。——こういうことを言うのは、まことに申し分ないんでございますが、本来でしたら埋文研の方にやっていただけたらいいと思うのですけれども、なぜ私が話せといわれたかと思ひますのは、多分数年前に、平安京近辺で緑釉陶器窯を掘ったから、そのことでも話したらいいのではないかと、というように勝手に解釈いたしております。前半は、消費地における現状、特に平安京の場合、今までのいろんな調査の成果によってある程度絶対年代、実年代がですね、わかってきているということでございます。そういう資料を定点になりうる一括資料をいく例かここで示したいとそういうふうに考えております。

お手元に行きました資料ですが、図版を作るときにコピーがなかったりして、今日説明させていただくものとは違うわけですけれども、まず、平安時代初頭のものとしてある程度互助的に実年代がわかるものとしまして、京都市埋文研が掘りました左京衛府のSD 04という資料があります。そこにはのっておりませんが、主馬と書いた墨書土器が発見されておまして、これは左・右の馬寮をですね、天応元年—781年—主馬寮として統合して、それを大同3年—808年—に復帰したということから、9世紀初頭に、その土器をもっていいのではないかとほぼ考えられているわけです。そこで出土している土器は、だいたいお手元の資料に似かよったものはございますけれども、若干御説明いたします。いわゆる前代の伝統を引き継ぎます土師器は、(前代の伝統を引き継ぎます)ヘラ削りあるいはヘラ磨きの手法をきちっと継承したようなものが出土しております。碗につきましては、口径が12~14.5cmぐらいのものと2種類出土しております。杯でいえば、高台付の杯、高台のない杯と、そういう2種類が発見されています。皿についてもやはり2種類の口径をもつものが発見されています。その他に、土師器の場合で申しますと、蓋とか高杯ですね、あの面取りをして上下とも非常に一見高杯、あるいは壺ですね。口縁がちょっとつぼんでいるような、10cm前後の壺がありますがそういうものとかですね、あるいは盤とかそういうものが一括資料として出土しています。須恵器につきましては、高台のある杯、ない杯、それから蓋があります。普通の宝珠鈕のつく蓋と、あるいは薬壺の蓋的なものが出土しておりま

す。平安初頭に特徴的な細長い長頸壺と申しますか、それらも勿論発見されております。この時期、9世紀初頭あるいは中葉ぐらい——それを中心としてほぼ埋まるであろうと考えられているわけですが、——のSD04では、あまり施釉陶器は出ておりません。けれども、それと様相をほぼ同一にする例えば、平安京右京三条三坊とか、あるいは榎原遺跡あるいは少し時期がさがるかも知れませんが、西市跡などというところから非常に良好な緑釉陶器、灰釉陶器が出土しております。今回の展覧会に出品しております——例えば、榎原遺跡についてみますれば、あの碗、皿を始めとしまして陰刻花文のある碗類とか豊富に発見されているわけでございます。これは、市の埋文研の方がいわゆる緑釉陶器の最初の——市の埋文研の方は三つに緑釉陶器を——三段階というふうに『資料選』で分けられているわけですが、その第一段階としては、一つの特徴として輪高台、あの貼り付けの輪高台をもち、内外面共に非常に丁寧なへう磨きを施す——そして陰刻花文あるいはその押圧による輪花というものが、非常に常用的な手法として用いられる——そういうような一群をこの時期に形成しているわけでございます。これにつきましては、例えば、榎原遺跡ですとか西市跡ですとか、そういうものにつきましては、灰釉陶器が共伴しております、例えば三足の盤とかですね、緑釉と同じような形態の蓋ですとか出土しております。是非、その発掘担当者でございます埋文研の方に、それがこちらの編年の何窯式にあたるかということをお伺いしてみたいなということを思っております。それともう一つ、先日来から緑釉陶器がですね、中国陶器の写しというようなことがいわれておるわけなんでございますけれども、一つ私昨日も何人かに伺ったのですが、多分こちらに来ていたのではないかと思います、榎原遺跡から出ております陰刻の蓮葉のはいりました耳皿が一点出土しておるわけでございますが、これとまったくモチーフを同じくする定窯系の白磁だと思うのですが、上海博物館に高台裏に、「官」の字が彫り込んであるものがございます。「官」とか「新官」とかいう銘が入るものにつきましては、一般的に五代というふうに言われておるわけなんですけれども、多分榎原遺跡の緑釉陶器が、その白磁写しであるということが間違いないとすればですね、時代差をどう考えたらよいか、中国の編年をもう少し上げて考えることができるのかどうかということも、中国陶器との関係において先生方に伺ってみたいという疑問点であるわけでございます。次に10世紀にはいますと、これは最近発見されたものでございますけれども、やはり京都市の埋蔵文化財研究所です、いわゆる近江系の緑釉陶器の高台裏に「天曆七」年、——935年——の紀年銘のはいりました緑釉陶器が発見されています。これは、まだ未発表でございますが、将来、平安京の実年代を知る上での貴重な資料になってくるのではないかとこのように考えております。それと、ほぼその時期なのでございますが、やはり平安京の左京衛府のSD01ですけれども、ここでは土師器の杯の内面に短歌が書かれたものがございます。何んて書いてあったのか今忘れてしまったのですが、その道の専門家に市の埋文研の方が聞かれたところ、ほぼ小野道風の晩年の時代を、より下ることはないであろうと——従って、10世紀の中葉という年代をほぼ考えられるであろうということで、一つの定点を決定されております。この時期になりますと、平安時代初頭にみられました、あの土師器の食器の形態ですね、碗・皿類、平安京初期時代には、比較的器種の区別がはっきりしておったものが、だんだん崩れてまいりまして——こういうことは全部宇野さんの書かれたものを読んでいただければすぐわかるわけですが、ざっと説明したいと思います——一つですね、スーと杯としても上にあがるもの以外にいわゆるいったん外反して、上に少しつまみ上げる「て」の字状口縁という、そういうものが区別できる状況となってまいります。そういう土師器の器種

の貧弱化を補う形で、いわゆる黒色土器の器形が、この時期になって非常に豊富になってくるのであろうというふうに言われております。あまりこまごまとやっておりますと時間が無くなりますので、——この辺の時期に平安京左京衛府では、他に黒色土器、須恵器も若干出ておりますが、この段階になりますと細かな破片がほとんど——あまりもう使われていないと——数量的にその何%、何%ということはおそらく出ておりませんが、非常に減ってくるということだと思います。この左京衛府では、やはり緑釉陶器が出ておりまして、これは先程申し上げました、いわゆる埋文研の方のおっしゃられた第1類という様相ではございませんで、いわゆる高台を削り出しにしたものが入ってくると、そういうような段階に入っております。

3番目の定点として、京都府の教育委員会の掘りました内膳町のSK18を一応考えることができるのではないかと思います。このSK18は、乾元大宝が4枚出土しておりまして、これは958年初鑄で11世紀初頭には鑄造を停止していたということから、京都府で報告された方は、だいたい1000年前後という、1000年前後の一括遺物であろうというふうに考えております。それは、図版16(本書P89, 第2図)に載せておりますのでご覧いただければと思います。

次の定点は、昨日来から何回も出しましたが、有名な寛治5年の5月13日の墨書のある土器でございます。これも本日図示(第2図)しておきましたので御覧いただければと思います。図示してありますので別に御説明することもないと思いますけれども、もうこの段階になりますと土師器の皿が大小と、もうそのセットだけに収束してきてしまっているという点と、あと黒色土器から瓦器にかわってきているというようなことが言えるんじゃないかと思います。その下、烏丸線№58井戸17以下ですね、これは別に実年代がある程度推定がつくとかそういうものではございませんけれども、土師器をならべてみまして、こういうことであろうというふうでやられた編年結果でございます。№58井戸につきましては、輸入陶磁が非常に多かったもので、こういうものが出ているということで、図示させていただきました。そこでですね、先程申しました内膳町の報告書で非常におもしろいことをやっております、内膳町で出土しましたすべての緑釉陶器を分類いたしまして、近江系、尾張系、山城系というふうに分類しております。それによりますと、だいたい10世紀代、10世紀後半から11世紀初頭にかけての遺構を、いろいろまとめたものなんでございますけど、私実際にこれを見たわけではございません。その報告書をそのまま引用させていただきますと、近江系は軟質なもの硬質なものあわせて73%、尾張系が16%で、山城系が28%というような状況になっております。この段階で非常に近江系ですね、いわゆる断面三角の高台の端部に一段のつく、ああいう近江系の陶器が、平安京の緑釉陶器の中で非常に重要な地位を占めているということが、御理解いただけるんじゃないかと思います。以上、だいたいこれまでの京都市の埋蔵文化財研究所あるいは京都大学の成果を、概観した程度で申し分ないのですが、平安京で少くとも今述べましたような定点を元にいたしまして、絶体年代がある程度動かない状況になってきているといえます。そういう中で、過去、将来とも各地の陶器を比較する接着剤、接点というような位置付けで定義されたわけです。

私、数年前に平安京で緑釉陶器の調査をした関係上、各地をすこしずつまわっているわけなんでございますけれども、いわゆる高台削り出しの山城系——山城系の陶器窯といえますと、現在私が調査いたしました西京区の大原野の石作窯、小塩窯あるいは、京都府教育委員会の調査いたしました亀岡の前山2・3号窯、あるいは黒岩1号窯、あるいは調査はまだ完全な調査ではございませんけれども本山遺跡、あるいは、幡枝周辺の遺跡、さらに京都ではございませんけれども、

大阪の吉志部窯跡では、緑釉の瓦と共に緑釉陶器も焼いていたと、瓦陶兼業窯であると堀江門也さんが、おっしゃっておりますが、そういうふうな中で、最近急激に、平安京あるいはその周辺における緑釉陶器生産というものの、その実態がわかってきたわけでございます。その平安京周辺で焼かれたと思われるものが、現在まであまりまわっておりませんけれども、昨日、宮城県の方で出土している可能性をおっしゃいました。宮城県にあるのかないのかどうかわかりませんが、少くとも西では斎宮に若干はいつているのではないかとというふうに考えております。さらに、吉岡先生のおっしゃいました、石川県の三浦上層のあたりにも入っています。西の方でいまましても尼崎あるいは岡山ぐらいまでは多分入っているのではないかと考えています。そういう意味で広い分布圏をもっていたということで、これからやはり平安京あるいはその周辺で発掘調査する者として、一つ猿投窯の編年を一つの基準とすると同時に、平安京周辺における緑釉陶器によって、やはりもう一つ新しい視点が開けてくるのではないかとというふうに考えております。また、京都周辺の窯跡の年代をだいたいいつ頃にもってくるかということですが、先ほどの前山2・3号窯、これは若干輪花がつかまして椀・皿を中心とするものなのでございますけれども、これと同時によく似た器種構成が消費地にあります。平安京の左京衛府のですねSD1、お手元の資料には図示しておりませんが、ほぼ相当するのではないかとこのように考えております。だいたいその変化の感じ、私もまだ詳しくやっておりませんが、前山2号窯3号窯を中心として、その後黒岩1号窯がくるであろうと、その前に石作窯がくるであろうというふうに一応考えておりますので、10世紀を中心としてかなりの窯跡における編年ができるのではないかとこのように考えております。

最後に、先程の中村先生の窯状遺構についてちょっと越境になるのでございますけれども、私、兵庫県魚住古窯址で今年の春、発掘調査する機会がございまして、先程の中村先生がスライドでお示しになりましたのとほぼ同じのような窯状遺構を検出しております。それについて、実は多分炭焼窯ではないかとすでに書いたんでございますが、——と申しますのは、中村先生のおっしゃったような土器類ですね、そういうものがまったく出ていないということです。もっとも、すぐそばに12世紀末～13世紀位の登窯がございまして、そこからは須恵器あるいは瓦の落ち込みがかなりございますので、遺物がまったく無いというわけではございません。けれども、特にその窯で焼いたと考えられるものがまったく無いことから、一応炭窯と考えております。ただですね、その窯の構造、例えば焼成室と煙道との境界、あるいは焚口付近に、意識的にその瓦を並べるとかそういうことをしておりますので、その時期の窯業生産となんらかの関係をもちながら、操業していたというふうに考えている次第でございまして、それが炭焼窯ではないのか滋賀県の兼康さんもおられることですので、ちょっとお話していただけたら良いかと思っております。それとですね、もう一つ炭焼ということで直接関連はないんでございますけれども、京都山城系の石作窯、小塩窯あるいは亀岡の窯跡群は、御承知のように（あのほぼ一辺が）あの底辺が1.5m前後の三角形をしている窯でございまして、私自身ああいう窯をどうやって焼くのかと、緑釉陶器を焼くのかという、今だにイメージがいただけないのでございますけれども、最近ある先生とお話ししてありましたところ、場合によったら、単なる生木ではなくて炭とかそういうものを考えてもいいのではないかとこの御指摘を受けたものがあつたわけでございます。と申しますのは、私が調査いたしました三角窯につきましても、あるいは篠の窯跡にしましても、緑釉陶器を焼いている割にはですね、しかも焚口と実際にその物を置く場所が非常に近接していると、その割には厘^ツか